

東日本大震災後宮古市における避難行動等の質的分析

Qualitative Research on the refuge behavior in Miyako citizen after the East Japan Earthquake 2011

水田恵三

Keizo Mizuta

尚綱学院大学総合人間科学部

Department of Comprehensive Human Science, Shokei University

The purpose of this paper is to exploring the characteristics of the evacuation in Miyako. Results of the analysis of the data of 111 people experience a collection of post-disaster Miyako citizens Miyako City were recruited, that in addition to the features of the evacuation of disaster after a general, evacuation began it is said by others, embankment there is such as thing that tsunami came overcoming was shocking. In addition, women were also characterized as a result of the start of the evacuation at the direction of her husband. Also, than the shelter of evacuation daily training, it was found that those that were evacuated to a place higher in many cases.

Keywords : Miyako city East Japan Earthquake 2011 refgee behavior

(目的)

平成23年3月11日に生じた東日本大震災は東北地方を始め各地に多大な被害をもたらした。3年半後を経過した現在でも多くの地域は復興途上である。その一方で、今後の対策のためにも避難行動、避難所、仮設住宅、借り上げ住宅、復興住宅など様々な検証が行われ始めている。発表者は発災後各地の被災地を見て回ったが、岩手県宮古市は津波常習地域であり、海に面した部分の高い防潮堤が有名であった。今回の地震で宮古市民がいかなる避難行動をとったか、いかに避難をしたか、生き延びた方々はどのような対応策をとったのかを知ることは重要なことである。

とりわけ宮古市は岩手県を代表する湾岸地帯であり、この地方の避難行動は、湾岸部の避難行動の参考となることであろう。

(方法)

平成23年度宮古市中央公民館事業として3.11 大津波体験語り継ぎエピソード集を出版している。これは名の男女 111名が手記を公民館で収集したものを市側で編集したもので、語りのデータそのものではない。これを市側の許可を得て分析し、岩手県北部の沿岸地域で、市民がどのような避難行動を行ったのかを分析した。111名の内訳は、年齢と性別しか分かっていないが、60歳以上が大半で、女性が大部分である。

なお、質的分析に当たっては、KH-coderを用い、1人の人の記述を一段落ごとにまとめ、頻出語、品詞間のクラスター分析（出現回数50回以上）、品詞間の対応分析（出現回数30回以上）を行った。

(結果)

出現100回以上の単語は以下である。

抽出語	出現回数
思う	575
来る	534
津波	529
人	405

避難	404
逃げる	329
言う	327
家	292
見る	279
行く	258
地震	258
自宅	254
車	253
波	242
水	211
出る	201
戻る	147
入る	145
聞く	144
上がる	134
前	131
日	124
持つ	122
自分	121
無い	120
居る	117
歩く	115
小学校	113
揺れ	112
夫	103
出来る	101

津波が来る、避難が等が多いが、避難行動としてはごく一般的な記述である。小学校に避難したものが多。

単語間のクラスター分析結果（一部）は以下の図1である。人から津波が来ることを言われて避難を開始したこと、以前をよりも高い波を経験したこと他に、堤防を越えたという衝撃が伝わってくる分析結果である。また車で避難した人が多かったこと、小学校に避難した人が多かったことも結果として示されている。

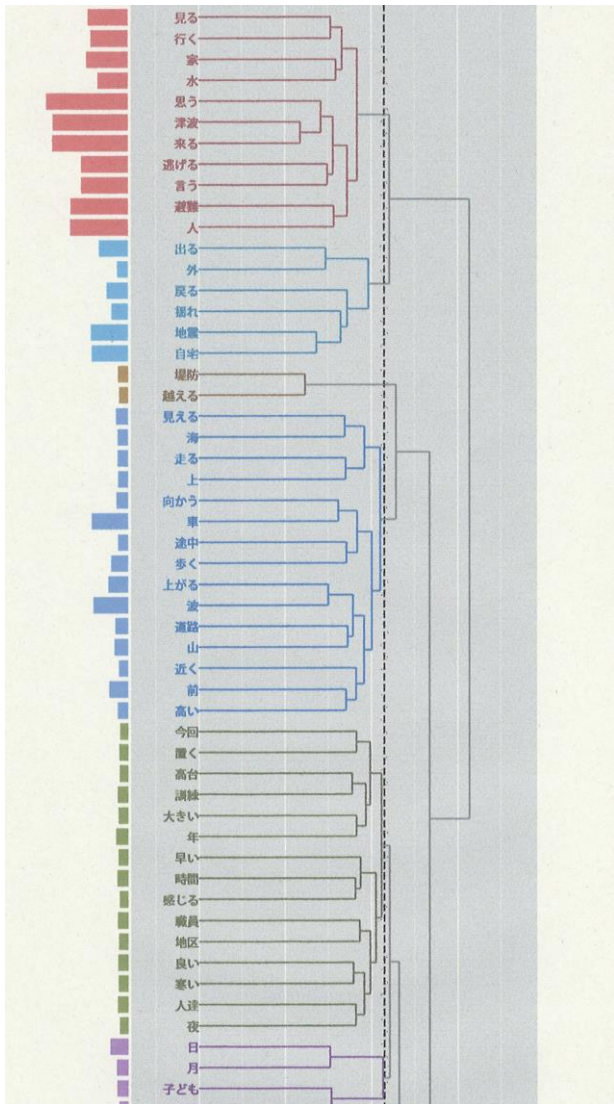


図1 単語間のクラスター分析結果

単語間の対応分析結果は図2である。

- ・津波が堤防を越えてやってくるほど大きかったこと
- ・夫から言われて（女性が）もしくは放送で車で逃げたこと
- ・公民館や小学校に避難した人が多かったこと
- ・地区で行われていた避難訓練が役に立ったこと
- ・娘や息子、孫などと避難したこと
等が示されている。

その他の分析に関して、記述された文章をそのまま分析すると、目立った記述に

- ・皆同じ行動なので安心した
- ・一度避難したら絶対に戻るものではない
- ・市役所の放送が壊れて情報が入らなかったのが困った
- ・45号線を越えて津波は来ないと信じられていた
- ・本当に水がそこまで来るまでを見るまでは警戒していなかった
- ・津波は来ない。あの防波堤があるという意識が強かった
- ・避難訓練は指定の場所ではなくより高いところがいい
- ・ガソリンがなかなか手に入らなかった
- ・避難所の運営は市役所では細かいところは分からな

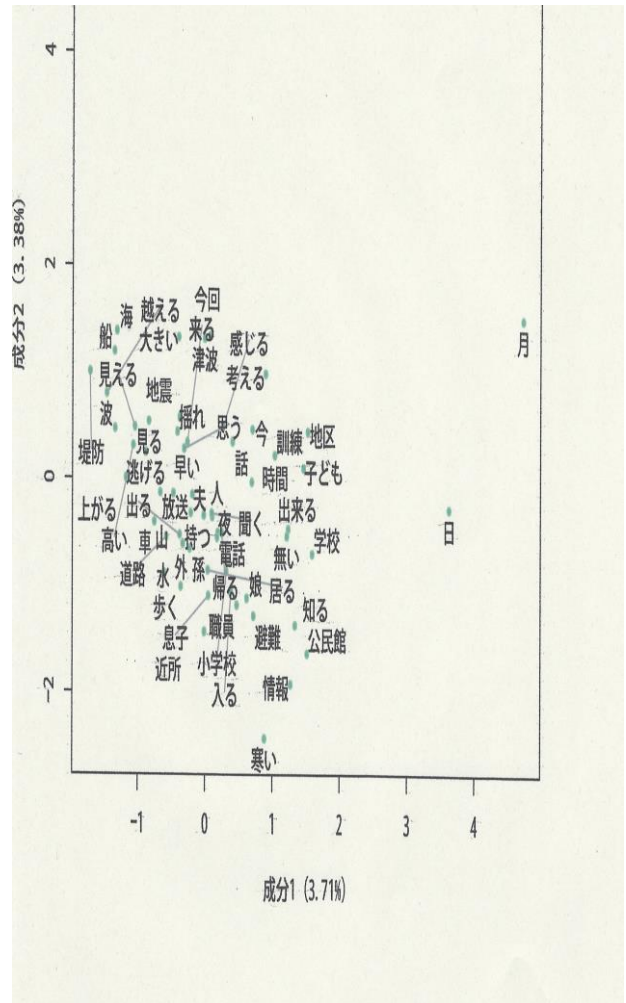


図2 単語間の対応分析結果

(結果続き)

- い。自治会の方がいい。
- ・防災のサイレンはよく聞こえなかった
- ・津波は静かに上がってきた
- ・避難所運営は誰がやるのか分からなかった。結局は自治会に押しつけられ、学校にお世話になった。

(考察)

一時的分析であるので、十分な考察は加えられないが、避難に関しては
 ここまでは津波が来ないというのが仇となった。
 皆が呼びかけて避難した。人との呼びかけが読み水になる
 この地域は高い堤防への信頼が強く、停銅を超えて津波が来たことが精神的動揺をもたらした。
 防災無線のみに避難を頼ることは危険である。
 防災訓練は無駄ではないが、臨機応変に対応すべき。
 避難所の運営等はあらかじめ決めて、相談すべき

参考資料

平成23年宮古市中央公民館事業 3.11大津波体験語り継ぎエピソード集